教育研究業績書

2023年10月23日

所属： 看護学科　　資格： 准教授　　氏名： 浅野　浩子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	母性看護学　助産学　ハイリスク妊産褥婦　出生前診断　継続教育
学位	**最終学歴**
博士（看護学）	山梨大学大学院医学工学総合教育部ヒューマンヘルスケア学専攻博士課程

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.対象の発達過程や周産期における移行と健康課題、対象を取り巻く社会状況と医療システムを踏まえた看護・助産の役割の探求を支援	2021年4月～現在	山梨大学大学院医工農総合教育部看護学専攻修士課程の「母性看護学特論」において、指導教授と共に学生がEBNの手法と文献検索と文献クリティークの方法を学習する過程を支援し、アウトカムモデルを用いて文献の統合ができるように支援した。
2.オンラインシステムを利用した効率的・効果的な学習を支援する授業設計	2020年3月～現在	山梨大学医学部看護学科講義科目「母性看護活動論Ⅰ」（専門科目、2年次配当、必修2単位）、実習科目「母性看護学実習」（専門科目、３，４年次配当、必修2単位）などにおいて、Covid-19感染対策による遠隔授業のため、Moodle、Microsoft Stream、ZOOMによるオンライン授業の設計、オンライン教育システムを利用した授業資料作成や反転授業、形成的評価を行い、学生の自宅学習を支援する工夫を行った。またオンライン授業を受ける学生の学習環境に配慮し、反転授業や授業の復習を目的とした動画を教材として作成した。このほか、遠隔授業開始に伴い、ZOOMシステムの使用について学生にシステム参加方法の説明、看護学科教員に伝達講習を実施し4月からの講義開始の準備を支援した。
3.看護におけるコンサルテーションの実際について理解を深める	2019年11月	山梨大学大学院医工農総合教育部看護学専攻修士課程の「看護実践方法論」にて母性看護専門看護師(CNS)における看護コンサルテーションの実際を解説、また学生が経験した看護実践経験より、看護職が抱えやすい日常的な諸問題を分析し、現状を改善するためのコンサルテーションの方法について検討する機会を設けた。
4.インストラクショナルデザインによる学生の主体的な学習行動を支援する授業設計	2019年1月～現在	山梨大学医学部看護学科講義科目「母性看護活動論Ⅰ」（専門科目、2年次配当、必修2単位）において、ARCSモデルやアンドラゴジー理論、アクティブラーニング等、インストラクショナルデザインを活用し、学生の学習の動機づけを図り、看護専門職としての意識を高め、学生の主体的な学習を支援する教授方略や教材の設計の工夫を行った。
5.学生の対象の理解と実習の体験を通した経験学習を図る実習プログラムの設計	2016年4月～現在	山梨大学医学部看護学科実習科目「母性看護学実習」（専門科目、３，４年次配当、必修2単位）において、学生が母性看護学実習への動機づけを高め、これまで学習した知識と技術を活用し実習活動に臨めるよう反転授業（オンライン動画）を作成した。また個々の学生や、実習グループメンバーが実習で体験した経験や学生の成長に応じてリフレクションを行い、実習体験を通した主体的学習を支援した。
6.母性看護専門看護師養成課程の修士課程大学院生に対する遺伝学の知識を実践に活用するための看護教育	2007年4月2019年3月	大阪府立大学看護学部博士前期課程　「臨床遺伝学」の講義科目において、専門看護師養成コースの学生を対象に周産期遺伝学と看護の実際について講義を行った。また遺伝学の知識を活用した対象の理解、学生が臨床でどのように遺伝学の知識を活用した看護実践について学生の臨床経験をもとに討議した。
2 作成した教科書、教材		
1.小林康江（編）日本看護協会出版会　助産師基礎教	2019年10月1日～	担当箇所　第3章Ⅳ　緊急時の処置とケア

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
育テキスト第7巻　ハイリスク妊産褥婦・新生児へのケア（2020年版～2022年版） 2.中込さと子、小林康江、荒木奈緒（編）　株式会社メディカ出版、ナーシング・グラフィカ　母性看護学①　概論・リプロダクティブヘルスと看護(第1版・第2版)	2019年1月15日～	第1版担当箇所　第5章-5　周産期医療システム p.91-94 第2版担当箇所　第5章-5　周産期医療システム p.98-100
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1.武庫川女子大学　広報入試委員 2.武庫川女子大学　看護学部臨地実習委員 3.キャンパス学生委員・学生相談員・スモールクラス担任として学生活動を支援	2022年4月～現在 2022年4月～現在 2017年4月～現在	武庫川女子大学看護学科での広報入試委員を務めた。 武庫川女子大学看護学科での臨地実習委員を務めた。 山梨大学医学部看護学科の学生委員会委員として、学生の学生生活、履修や進路、進学、就職に関するガイダンスや相談会開催の企画運営、個別相談を行い、学生生活の支援を行った。またスモールクラス担任として、学生の学生生活や履修、進学、就職活動、また国家試験対策に関する支援を行った。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.新生児蘇生法「一次」コース（Bコース）　インストラクター 2.アドバンス助産師 3.新生児蘇生法「専門」コース（Aコース） 4.母性看護専門看護師認定 5.助産師免許 6.看護師免許	2020年5月～現在 2015年12月～現在 2012年5月～現在 2006年11月～現在 1995年～現在 1994年～現在	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.母性看護専門看護師としての活動	2006年11月～現在	母性看護専門看護師として、看護職者、医師、保健師、他施設の母性看護専門看護師等よりケアや実践能力の実装、教育、倫理調整、研究活動、ならびにキャリア形成等に関する相談を受ける。
4 その他		
1.看護職者を対象とした看護倫理研修 2.福岡県看護協会研修の講師 3.大阪府看護協会研修の講師	2019年5月～2021年3月 2014年～2015年 2011年～2014年	山梨大学附属病院看護部教育委員会主催の継続教育看護ラダー別「看護倫理」ラダーⅠ・Ⅱ・Ⅲの看護職者を対象に年3回コースの看護倫理研修を行った。 福岡県看護協会主催の保健師、助産師、看護師を対象とした母性看護「胎児異常とグリーフケア」について講義を行った。(2.5時間) 大阪府看護協会主催の保健師、助産師、看護師を対象とした母性看護「ハイリスク妊婦の看護」「胎児異常とグリーフケア」について講義を行った。（3時間）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.流産・死産経験者で作るポコズママの会（編）ともに生きるたとえ産声をあげなくとも	共	2007年6月1日	中央法規出版	担当箇所：,臨床助産師の立場から　医療現場でお母さんの心に寄り添う（p.144-155）
2.川野雅資(編）実践に生かす看護コミュニケーション	共	2003年10月1日	学習研究社	担当箇所：第4章　看護コミュニケーションの実際　褥婦への授乳介助（p.148-151）
2 学位論文				
1.周産期遺伝看護実践のパフォーマンス向	単	2019年3月	山梨大学大学院医学工学総合教育部	母性看護専門看護師27名を対象に、遺伝学的問題をもつ妊婦の看護実践困難場面を調査し、学習課題の分析による教育プログラムを作

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
上を目指す教育プログラムの開発			ヒューマンヘルスケア専攻　博士論文	成した。母性専門看護師15名を対象に教育を実施し、研修後３か月の看護実践を質的内容分析した。また学習への動機づけの程度により教授方法と教材の評価を行った。教育プログラムにより参加者の基礎知識が向上し「母親の思いや体験を深く理解しケアニーズを明らかにする」「助産ケアの応用による母親の妊娠、胎児/子どもの健康、養育への対応」「母性看護実践への遺伝看護の導入」「周産期ケアシステムの改善」「助産師の遺伝看護教育」「施設の医療者の評価による臨床ケアの評価」の看護実践活動が生じた。
2.胎児の形態異常を診断された母親への超音波検査の胎児情報提供プロセスにおける看護援助	単	2003年3月	大阪府立看護大学（現 大阪府立大学看護学部）博士前期課程家族支援看護学・母性看護学専攻　修士論文	参加観察法により妊娠中期以降に胎児の形態異常が診断された母親４名の妊婦健康診時、入院時の対象の言動を産後１か月まで観察し半構成面接を行った。胎児異常の診断後、母親には周期的、螺旋的に「ショックな気持ち」が見られた。また検査結果で一喜一憂し、一方で緊張する様子が見られた。母親は夫や家族への子どもの病気についての話しづらさを感じていた。また夫や家族が子どもの誕生を喜ぶ様子がつらいと感じた場合もあった。出産後は、妊娠中より想像していた状態と比較して「予想通り」であった、または「想像と違う」とショックを受けた人があった。
3 学術論文				
1.予定日超過による分娩誘発を減少させるための過期妊娠予防プログラムの取り組みの実態	共	2023年3月31日	山梨大学看護学会誌. 21(2), 1-5.	研究目的は対象者の過期妊娠予防プログラム（以下,KYP）①ウォーキング②スクワット③お尻歩き④乳頭刺激の実施状況を明らかにすることである。対象者は2019年度の院内助産対象者のうち、KYP実施の希望があり、分娩日までKYP実行シートを記録できた妊婦66人。妊娠32～35週にKYPを実施し、妊婦の好きな項目を37週（乳頭刺激は38週）から開始し、実行シートに記録してもらい、Microsoft Excel 2019 を用いてKYP各項目の実施状態について基本統計量を算出した。9割以上の妊婦が何らかのKYPを実施しており、種別ではウォーキングを選択した妊婦が一番多かった。また、お尻歩きに関しては分娩誘発の方法としてのエビデンスはいまのところ認められていないが、陣発群のほうが誘発群よりも週数ごとのKYP実施人数の割合と実施率が、予定日以前の週数において高かった唯一の項目であった。
2.ARCSモデルを用いた周産期遺伝看護教育プログラムの評価（査読付）	共	2021年3月	日本遺伝看護学会誌.(19)2,54-65.	母性看護専門看護師15名を対象に、周産期遺伝看護教育プログラムを行い、教授方法の評価と教材評価を行った。また知識の修得状態は基礎知識テスト、学習努力の評価は独自の調査票を作成し評価した。調査の結果、教授方法と教材は参加者の＜興味・関心＞が高く、学習と看護実践の＜関連性＞を認識できるものであった。また研修後の看護実践の振り返りや自己の学習状況に＜満足感＞が得られた。一方、研修後の看護実践や学習に＜自信＞が低い状態であり、学習や課題の量に＜満足感＞が低い状態となった。
3.周産期遺伝看護教育プログラムによる母性看護専門看護師の看護実践の変容（査読付）	共	2020年8月	日本遺伝看護学会誌.(19)1,50-61.	教育プログラムに参加した母性看護専門看護師15名の看護実践活動を質的に分析し教育の効果について検討した。教育プログラムは事前課題学習、集合研修、研修後3ヵ月間の看護実践とリフレクションを行い、研修後3ヵ月に半構成面接法と質的内容分析を行った。分析の結果、看護の変容を目標として実践した看護活動は、①母親の思いや体験を深く理解しケアニーズを明らかにする、②母性看護実践への遺伝看護の導入、③周産期ケアシステムの改善、④他者評価による自己のケアの評価に統合できた。
4.新生児看護領域の高度実践看護師のための遺伝看護ケアの学習課題に関する質的研究　（査読付）	共	2017年3月	日本遺伝看護学会誌.15(2),68-76.	新生児集中ケア認定看護師5名を対象にしたグループ・インタビューを行い、遺伝看護上の問題について質的内容分析を行った。分析の結果、新生児期の遺伝看護に関する学習課題として、①両親・家族をケアするための遺伝リテラシー、②両親が遺伝性疾患を持つ子どもの養育を始める過程の支援、③新生児期以降の遺伝性疾患を持つ子どもの養育支援、④家族中心のケアのためのシステム構築、⑤数ヵ月の命と予想される子どもと親のQOLの質を高めるケア、が挙げられた。
5.母性看護領域の高度実践看護師のための遺伝看護ケアの学習課題に関する質的研	共	2017年3月	日本遺伝看護学会誌.15(2),77-86.	母性看護専門看護師12名を対象にグループインタビューを行い、周産期の遺伝看護上の問題について質的内容分析を行った。分析の結果、周産期の遺伝看護に関する学習課題として、①遺伝学的検査、②遺伝性疾患、③遺伝カウンセリング、④妊娠初期の妊婦ケアの意

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
究　（査読付）				義、⑤胎児異常の診断を受けた両親へのケア、⑥先天異常を持つ子どもの養育過程支援、⑦胎児と死別した両親のグリーフケア、⑧次子の妊娠への不安を持つ両親への支援に関する教育と、⑨看護職者への遺伝看護ケアのサポート、が挙げられた。
6.周産期・新生児領域の高度実践看護師からみた遺伝看護の継続教育への課題（査読付）	共	2016年8月	日本遺伝看学会誌.15(1),69-80.	母性看護専門看護師27名と新生児集中ケア認定看護師94名を対象に、無記名自記式質問紙により、遺伝看護ケアの実施状況、態度、および学習への動機づけについて調査を行った。この結果、母性看護専門看護師と新生児集中ケア認定看護師の約8割が、ケアに積極的であり、やりがいをもって関わっていた。しかしケアに関する知識や経験不足によって、自己の力不足を認識し、ケアの目標設定や評価ができずケアへの自信や満足感が得られない状態であった。
7.妊産褥婦におけるドメスティック・バイオレンスに関する実態(第1報)スクリーニング(VAWS: Violence Against Women Screen)による調査（査読付）	共	2012年4月	大阪母性衛生学会雑誌.　48(1),21-28.	1019名の妊婦のDVスクリーニング：VAWSの結果を診療録から収集した。初回の陽性（9点以上）判定者は200名（19.6%）であった。パートナーからの暴力は、多いものから、精神的暴力、性的暴力、身体的暴力の順であった。また、VAWS 10点以上では身体的暴力や言動が怖いという訴えがあり、支援の必要性が示唆された。また得点が高いほど、早産傾向にあり、平均出生体重が低かった。
8.妊産褥婦におけるドメスティック・バイオレンスに関する実態(第2報)　ケアの現状と考察（査読付）	共	2012年4月	大阪母性衛生学会雑誌.　48(1),29-35.	1019名の妊婦のDVスクリーニング：VAWSの結果陽性（9点以上）判定者に対する看護実践の内容を診療録より抽出し質的に分析した。当センターの助産師によるケアは、主に「エモーショナルサポート」「スタッフ間での患者情報の共有」「セイフティプラン」「社会資源の活用」の４つであった。
9.日本における高度看護実践家としての専門看護師の活動の実態と成果・課題に関する研究	共	2010年4月	INRインターナショナルナーシングレビュー.33(2),79-82.	わが国における専門看護師(CNS)の活動の実態などを明らかにすることを目的にCNSを対象にアンケート調査を行い、64名より回答を得た。その結果、CNSは専門分野を超えて包括的なアセスメントを行い、医療チーム間の葛藤や治療の硬直を改善することで、長期入院や急性状態の遷延化を防止していることが分かった
10.胎児の骨形成不全症が診断された母親への超音波検査を通しての看護援助　（査読付）	共	2004年12月	日本遺伝カウンセリング学会誌.25(2),49-53.	超音波検査で胎児の形態異常が診断された母親が超音波検査で提供される情報をどのような思いで受け止めているのかを明らかにすることを目的に,先天性骨形成不全症を診断された事例に,参加観察法および半構成的面接を実施した.その結果,胎児異常の診断を説明されたとき,対象は精神的動揺や胎児の異常を否定したい気持ちをもっていた.異常のある子どもを産むことへのとまどいを感じながらも,出産が近づくにつれ心の準備を整えており,超音波検査の結果に一喜一憂しながら,正常の妊婦と同じように子どもの様子を想像するなど,子どもへの共感をもって出産を迎えていたことが分かった。
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
1.家族支援企画：教育講演1 「学習モデル（インストラクショナルデザイン）を用いた医療者の教育について ～胎児異常を診断された家族への支援を次世代に伝達するヒント～」	単	2023年2月25日	日本胎児心臓病学会第29回学術集会	近年、医療技術の進歩により、90%以上の先天性心疾患が生存可能となり、多くの患者が成人期に達するようになった（丹羽,2015）。しかし、重症で予後が悪いことが予測される疾患や、遺伝性疾患の可能性がある場合、疾患に対する多様な家族の理解や反応があり、その支援も個別性の高い対応が必要となる。これまで医療者は、試行錯誤を繰り返し、胎児診断の家族支援を実践してきた。このような家族支援の複雑な問題を解決できるような、高度なレベルのパフォーマンスを発揮するための知性を「実践知（金井,楠見,2012）」という。実践知は、単なる知識や技術の学習では獲得することが難しく、種々の対象や事象に対する問題解決の方略、問題解決への積極性や協調性、個人的責任等として現れる態度、そして、自己の実践過程を省察（リフレクション）する経験を重ねることにより熟達化される。本講演では、この家族支援の実践知を他者に伝達し、多くの医療者が広く実践で活用できるよう、インストラクショナルデザインの学習モデルを用いて解説する。
2.教育講演「複雑化する母子と家族を支える助産師の心のケアー母性看護専門看	単	2019年5月23日	日本助産師会第75回日本助産師学会	周産期における母子の背景とケアニーズを踏まえ、母子と家族を支える高度実践看護師としての助産師の役割と課題、母子と家族の心のケアの実際について講演を行った。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
１．学会ゲストスピーカー				
護師の役割と実践」				
3.シンポジウム「周産期救急対応におけるチームワーク　周産期救急医療における母性看護専門看護師の役割」	単	2014年9月13日	第55回日本母性衛生学会	周産期救急対応における助産師や母性看護専門看護師が対応した事例と課題について実態調査の結果をもとに報告した。
4.シンポジウム「出生前診断に関わる女性への継続ケア」	単	2014年3月23日	第28回日本助産学会学術集会	出生前診断後出産までの問、夫婦はどのような体験をし成長するのか、また助産師に求められる継続支援について報告した。
5.胎児異常の診断をうけた妊婦のケアに関する文献レビュー	共	2013年9月1日	日本遺伝看護学会誌.12(1),36～45.	2002年から2012年までの21文献を収集し、胎児異常の診断を受けた女性と家族の経験、看護職者のアプローチについて分析した。胎児異常を診断され精神的衝撃を受けた後、夫婦は子どもの成長や治療、家族の将来を考えながら、妊娠中を過ごす。診断の時期や疾患の予後によっては、妊娠を継続するかどうか意思決定をすることもある。多くの喪失感や孤独感、意思決定に伴う重い責任を感じながら、女性達は生まれてくる子どもの将来をイメージし、自身の体験を前向きに受け止めていた。また女性達は医療者が継続的に関わりながら、共感的、積極的に意思決定に影響を与えない公平な態度で接することを求めていた。
6.シンポジウム　母体支援のためのチーム医療のあり方	単	2012年7月29日	胎児心臓病母体支援研究会	胎児循環器異常を診断された母体へのケアについて新生児科医師、産科医師、助産師、小児科看護師、遺伝カウンセラーの立場から討論を行うシンポジウムで、助産師の立場から母体を中心とした支援と、新生児科、小児科医師や看護師との連携について討議を行った。
7.サテライトシンポジウム「変革を求めて助産師のチャレンジ－連携と協働―胎児の異常を診断された母親へのプライマリーケア」	単	2012年7月12日	第46回日本周産期・新生児学会	総合周産期医療センターにおける胎児診断を受けた両親への看護実践例より、助産師や母性看護専門看護師が行う看護ケアを挙げながら、医師やコメディカルとの協働について報告した
8.看護セッション 胎児心臓疾患を診断された母親への産科・小児循環器科の看護の実践と連携	単	2010年2月20日	第16回日本胎児心臓病研究会	胎児心臓疾患を診断された母親への支援について、産科、小児科の看護師が支援の在り方について検討するセッションで、産科診療における看護の実践について、外来診療で実践する母親と家族への支援について報告、討議をおこなった。
9.シンポジウム　母性看護専門看護師の実践活動	単	2008年6月21日	第10回日本母性看護学会	総合周産期医療センターに勤務する母性看護CNSとして、CNSの実践活動や施設内での役割拡大と課題について、CNS認定後の2年間の体験から報告した。
10.シンポジウムⅠ 治療拒否と看取りの医療 出生前診断された妊婦および家族への看護のアプローチ	単	2007年6月20日	日本小児外科QOL研究会	出生前診断後、子どもの治療拒否と看取りについて、医療チームがどのようにアプローチを行うか、看護職の立場から支援の在り方について討議した。出生前診断された妊婦および家族の児の治療の受け入れや、看取りの過程を支援する助産師の役割と医療者間の協働について報告を行った。
11.「シンポジウム　胎児診断とその家族への対応」 出生前診断された妊婦および家族へのアプローチ	単	2006年11月9日	第47回日本母性衛生学会学術集会	胎児診断とその家族への支援について、看護職、母性看護専門看護師の立場から、事例への支援を通して発表した。
２．学会発表				
1.自然陣痛発来を目指した過期妊娠予防プログラムの実践報告	単	2021年11月6日	第21回山梨大学看護学会学術集会	妊娠37週以降の妊婦のローリスク妊婦を対象に、自然陣痛発来を目指した、ウォーキング、スクワット、お尻歩き、乳頭マッサージの4種類を組み合わせた「過期妊娠予防プログラム（KYP）」による妊婦の自然陣痛発来への効果について分析した。KYP導入前の2017年度とKYP導入後の2019年度では、KYP実施による予定日超過の誘発分娩の発生率に有意差は見られなかった。KYPの実施状況を見ると、種類の選択や実施頻度、平均実施時間の個人差があり、自由な種類の選択や頻度では効果が見られないと考えられた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
2.がん看護領域の専門看護師による遺伝看護実践の状況と学習意欲に関する検討	共	2018年9月15日	日本遺伝看護学会第17回学術大会	がん看護専門看護師613名を対象とし、遺伝看護ケアの実施状況と態度、遺伝看護実践能力向上に対する学習意欲に関連する動機と関心の実態について、自記式質問紙調査を行った。遺伝的課題を持つがん患者、家族ケアとして遺伝性のがんの可能性のアセスメントから、理解へのサポート、不安・葛藤・苦悩への対処、身体的症状コントロールなど、幅広いケアを7-8割の対象者が実施していた。また6割以上が学習への興味関心をもち、スキルアップのメリットを考えていた。
3.母性看護専門看護師の周産期メンタルヘルスケアにおける役割と課題	共	2018年6月2日	第5回日本CNS看護学会	日本専門看護師協議会に所属する母性看護専門看護師46名を対象に、産後健診事業における役割や看護実践内容について無記名自記式調査を行った。母性看護専門看護師が組織内で果たしていた役割は「ダイレクトケア」「院内外のケア連携の調整」であった。また介入の実際は、精神面の状況把握、家族支援体制の確認であり妊娠期から継続したケアを行っていた。
4.DVスクリーニング(VAWS:Violence Against Women Screen)を用いた妊婦に対する看護介入の実際	共	2012年11月16日	第53回日本母性衛生学会学術集会	DVスクリーニング：VAWSによってDV陽性判定した妊婦5名の診療録より、VAWSの点数、各事例の暴力の内容、その時の看護師の対応を抜き出し事例の看護について報告した。妊婦にとってスクリーニングが夫婦の関係性について振り返る機会となっていた。また助産師は妊婦と一緒にチェックしながら、安全な子育て環境について一緒に考える機会となっていた。
5.網膜色素変性症による視覚障害のある女性への、妊娠、出産、育児支援　ある一家族の体験と看護の関わり	共	2012年9月28日	日本遺伝看護学会第11回学術大会	網膜色素変性症により全盲に近い視力障害がある女性の妊娠期から継続した出産と育児支援の過程について報告した。また女性への支援は、視覚障害をもちながら妊娠と子育てすることをポジティブに受けとめること、障がいをもつ女性自身が主体的に育児したいという思いを、家族や看護職者が共に、根気よく支援することに要約された。
6.妊産褥婦におけるドメスティック・バイオレンスに関する実態(第1報)スクリーニング(VAWS: Violence Against Women Screen)による調査	共	2011年7月9日	平成23年度大阪母性衛生学会学術集会	1019名の妊婦のDVスクリーニング：VAWSの結果を診療録から収集した。初回の陽性（9点以上）判定者は200名（19.6％）であった。パートナーからの暴力は、多いものから、精神的暴力、性的暴力、身体的暴力の順であった。また、VAWS 10点以上では身体的暴力や言動が怖いという訴えがあり、支援の必要性が示唆された。また得点が高いほど、早産傾向にあり、平均出生体重が低かった。
7.妊産褥婦におけるドメスティック・バイオレンスに関する実態(第2報)　ケアの現状と考察	共	2011年7月9日	平成23年度大阪母性衛生学会学術集会	1019名の妊婦のDVスクリーニング：VAWSの結果陽性（9点以上）判定者に対する看護実践の内容を診療録より抽出し質的に分析した。当センターの助産師によるケアは、主に「エモーショナルサポート」「スタッフ間での患者情報の共有」「セイフティプラン」「社会資源の活用」の４つであった
8.未管理妊娠・飛び込み分娩の養育問題と育児支援	共	2010年11月7日	第55回日本未熟児新生児学会学術集会	2006年度から2010年度に関わった未管理・飛び込み分娩事例48例の情報をカルテから分析した。初診時母子手帳所持は5例、助産券利用は23例、生活保護受給が8例で、分娩場所は自宅が2例、救急車内が5例、そのほかが2例であった。また、帝王切開は12例、低出生体重は18例、NICU等入所児は19例、死産・新生児死亡・乳児死亡は各1例であった。
9.専門看護師（Certified Nurse Specialist, CNS）の活動の実態と成果・課題に関する研究	共	2009年11月28日	第29回日本看護科学学会学術集会	日本専門看護師協議会会員の専門看護師(CNS)238名に対し、郵送法によりCNSの活動実態・成果と課題に関する質問紙調査を行った。CNSへの相談依頼は病棟看護師が最も多く、次いで主治医、病棟看護師長の順であった。依頼内容は、「患者とのコミュニケーション」「医療チームのまとまりの悪さ」「精神状態の悪化」などであった。またCNSがかかわった対象疾患は悪性腫瘍、心疾患、脳梗塞及び脳性麻痺などの順に多かった。
10.バースプラン立案時の実態調査　初産婦の現状	共	2006年11月20日	第47回日本母性衛生学会学術集会	産褥4-5日目の褥婦6名に半構成面接を行い、バースプランをどのように立案したのか質的に分析し15項目の下位カテゴリー6項目の情意カテゴリーに分類した。褥婦の語りより、立案時の状況として「情報源をもとに立案する」「夫や家族に相談」「立案困難な要因がある」「ツールや情報提供に問題がある」「母親になる言動と計画は関係ない」「効果を実感」が起こっていた。
11.13トリソミーと診断	共	2005年5月	第29回日本遺伝カ	妊娠25週の時染色体検査により胎児の13トリソミーを診断されたA氏

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
された母親への周産期の看護 ―周産期の死への看護の役割―		29日	ウンセリング学会学術集会	の胎児情報の認識と、周産期の気持ちの変化のプロセスを参加観察法と半構成面接法により調査した。A氏は診断直後は現時点で胎児の形態異常が診断されたことへの怒りやショック、推定体重の変化なし・不安を感じながらも分娩場面をイメージし、出産を計画した。また児の予後が短いことを受け止めようする中で周囲の人が子どもの誕生を待ちわびる姿をつらく感じることもあった。
12.胎児の骨形成不全症が診断された母親への 超音波検査を通しての看護援助	共	2004年5月7日	第28回日本遺伝カウンセリング学会学術集会	妊娠中20周で胎児の大腿骨低形成を診断されたA氏の胎児情報の認識と、周産期の気持ちの変化のプロセスを参加観察法と半構成面接法により調査した。A氏はあらためて超音波検査で胎児の形態異常を指摘され、精神的に動揺しながらも、子どもの疾患についてより理解を深めようとした。またエコー中の胎児の様子を想像したり、胎児の言葉を想像することを楽しんだ。妊娠末期にはあらかじめ児の異常を知らされたことで心の準備ができたと考えるが、夫とは話題にしづらいと感じていた。
３．総説				
1.現場が変わる！チームに働きかける母性看護CNSの実践[11]特定妊婦の継続支援	共	2019年11月25日	助産雑誌.73(11),948-953.	母性看護専門看護師の役割を特定妊婦の継続支援の事例をあげ、具体的な実践について専門看護師のアセスメントの視点から紹介する。
2.遺伝カウンセラーとは異なる】出生前検査における助産師の役割　助産師は出生前検査にどこまでかかわれるか	共	2016年3月1日	助産雑誌.70(3),174-177.	最近の出生前検査導入に向けて、妊娠期の発達課題に取り組む女性と家族へのケアの充実は欠かせない。妊娠期の妊婦の背景や適応を踏まえたケア体制について解説する。
3.周産期救急対応におけるチームワーク 周産期救急医療における母性看護専門看護師の役割	単	2015年4月1日	母性衛生.56(1),16-21.	周産期救急対応における助産師や母性看護専門看護師が対応した事例と課題について実態調査の結果をもとに報告した。
4.”専門看護師”活用で病院が変わる!看護管理者が知っておきたいCNSの可能性】「専門看護師」実践報告と看護管理者の視点　母性看護　母子専門医療機関で見えてきた母性看護CNSの可能性	単	2013年11月1日	看護.65(14),080-083.	総合周産期医療センターの実践活動から見えてきた母性看護CNSの役割の可能性について報告を行う。
5.胎児異常の診断をうけた妊婦のケアに関する文献レビュー	共	2013年9月1日	日本遺伝看護学会誌.12(1),36-45.	2002年から2012年までにPubMed　CHINAHLに投稿された21文献を収集し、胎児異常の診断を受けた女性と家族の経験、看護職者のアプローチについて分析した。胎児異常を診断され精神的衝撃を受けた後、夫婦は子どもの成長や治療、家族の将来を考えながら、妊娠中を過ごす。診断の時期や疾患の予後によっては、妊娠を継続するかどうか意思決定をすることもある。多くの喪失感や孤独感、意思決定に伴う重い責任を感じながら、女性達は生まれてくる子どもの将来をイメージし、自身の体験を前向きに受け止めていた。また女性達は医療者が継続的に関わりながら、共感的、積極的に意思決定に影響を与えない公平な態度で接することを求めていた。
6.【女性と出生前診断　助産師の役割】出生前検査の理解　妊婦健診で行なわれる胎児診断としての超音波検査に関する概説	共	2013年5月25日	助産雑誌.67(5),357-360.	妊婦健康診査で行われる超音波検査の目的と種類、情報提供の際の倫理的課題について解説する。
7.【女性と出生前診断　助産師の役割】出	共	2013年5月25日	助産雑誌.67(5),377-381.	出生前検査を受ける女性の体験と看護について解説する。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
３．総説				
生前診断にかかわる助産ケア　超音波検査で胎児の異常を診断された妊婦へのケア				
8.胎児異常を診断された母親と家族への助産実践に関する考察	共	2012年9月1日	日本遺伝看護学会誌.11(1),36-43.	助産師および母性看護専門看護師とての実践活動の経験に基づいて助産師の役割が他の専門家 との協働の中でどのように果たされるものであるかを考察した。
9.【知っておきたい基本と最新知識　双胎妊娠分娩・育児へのCureとCareの調和】一絨毛膜二羊膜双胎(MD双胎)一児子宮内死亡によるリスクと管理・ケア	単	2012年9月1日	Birth.1(7),49-55.	一絨毛膜二羊膜双胎(MD双胎)の一児子宮内死亡時の母体のリスクと管理また、母親と家族のケアについて解説した。
10.ひとつうえの看護の力　CNS　母性看護専門看護師編　医師と妊婦,組織と組織の間をつなぎ,底上げを図る	共	2011年8月1日	看護管理.21(9),817-823.	周産期医療におけるチーム医療の中で母性看護専門看護師が果たす役割について、協働している施設の医師と共にインタビューを受け報告をした。
11.社会格差と健康　看護からのアプローチ（２）妊産婦の生活背景に見る格差	単	2010年10月1日	INRインターナショナルナーシングレビュー.33(5),26-30.	産科医療で経験される「格差」より生じた母親の問題を背景としながら、筆者がこれまでに経験した母親とのかかわりと「格差」により生じた問題に対する看護の役割についてまとめる。
12.周産期からNICUで過ごす子どもの命と死；家族へのかかわりとEnd-of-Life Care［助産の場での看護実践］（２）命の現場に従事する医療従事者へのこころのケアとメンタルヘルス	単	2009年12月1日	小児看護. 32(13). 1734-1739.	赤ちゃんの死に直面することは、家族にとってはもちろんのこと、医療従事者にとってもショックな出来事である。医療従事者は自分自身の感情を受け止めながら、家族とかかわることになる。家族へのより良いケアを検討していくとき、チームがケアに協働し、ケア提供者の気持ちを支えながら、ケアを提供することが重要となる。
13.各分野のCNSが注目する臨床看護を変える重要論文 胎児異常を診断された妊婦の理解と看護	単	2008年5月15日	INRインターナショナルナーシングレビュー. 31(3) , 68-72.	母性看護領域では、出生前診断を受けた母親および家族の理解とサポートに関する研究および実践が注目を集めている。本稿ではそのなかでも胎児の異常を診断された妊婦の心理的側面の理解と、周産期における意思決定のアプローチに焦点をあてる
14.めざせスペシャリスト ステップアップのための最新資格ガイド 母性看護専門看護師	単	2008年4月30日	月刊ナーシング. 28(5),150-151.	専門看護師には実践、相談、調整、倫理調整、教育、研究の6つの役割がある。母性看護専門看護師として実践する6つの役割について、著者の実践活動から説明する。
15.【産科スタッフも知っておきたい　障害を持つ子ども,持つかもしれない子どもの家族へのアプローチ】妊婦健診の場で出生前診断された妊婦へのアプローチ(解説)	共	2005年9月1日	ペリネイタルケア. 24(9),15-18.	障害を持つ子ども、持つかもしれない子どもの家族へのアプローチについて、妊婦健健康診査の場で行われる出生前診断のうち、超音波検査における妊婦へのアプローチについて解説した。胎児発育の評価を目的として行った超音波検査で時に胎児の異常が発見されることも珍しくはない。母親と家族が妊婦健診で提供された情報をどのように受け止め、妊娠の継続についてどう考えているかを理解し、支援していくという看護援助が重要である。
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.ゲストスピーカー「母性看護CNSを取り	単	2021年3月21日	日本母性看護学会TSUMUGU会 キック	母性看護学会主催の母性看護専門看護師の看護実践の質向上をはかる活動として、TSUMUGU会が設立された。このキックオフミーティン

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
巻く関連団体の動向」			オフミーティング	グの場で、これまでの母性看護専門看護師による高度実践の質保証や活動の場の拡大に向けた活動の経緯を報告した。また、日本専門看護師協議会による認定支援や教育、研究活動における課題について報告を行った。
2.高度看護実践家育成に向けた大学院教育における実習のあり方　CNSから見た大学院修了時点で必要とされる臨床ケア能力	共	2011年12月	第31回日本看護科学学会学術集会交流集会	交流集会では、現在CNS教育のために行なわれている臨地実習での実情について、実習指導者として関わっているCNSの立場から話題提供し、参加者との意見交換を進めた。大学院でCNS教育に携わる教員、大学院CNS養成課程の学生、臨床で指導者として関わるCNSと意見交換を行い、CNS教育上の課題について検討した。
６．研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2020年6月2022年3月	山梨県母性衛生学会副会長
2.2019年7月～現在	日本遺伝看護学会査読委員
3.2019年6月～現在	日本母性看護学会評議員
4.2018年6月2021年6月	日本専門看護師協議会理事
5.2016年3月1日～現在	日本CNS看護学会査読協力員
6.2012年5月1日2014年4月30日	大阪府看護協会開催看護学会査読協力員